京極家七代高詮菩提寺

能仁寺遺跡

京極家歴代の墓所がある徳源院（米原市清滝）の南側から、第七代当主高詮個人の菩提寺である「能仁寺」の仏堂の基壇が発掘調査でみつかりました。南北約12.5m、東西は不明瞭ですが約14mの規模で、南辺は自然石による化粧積み、北辺は石組み溝で区画されています。北辺の溝にそって４つの柱の基礎石とこれらをつなぐ地覆石が残されていました。さらに、基壇の東辺を区画する段差の東側約３メートルに山門跡らしい遺構がみつかりました。小石を帯状に積み上げたものが南北２ヵ所に分かれており、土塀の残骸と考えられます。南側には礎石とみられる石が設置されています。礎石が参道の石垣の延長上にあることや、基壇と参道が接する場所にあることから、山門の遺構と思われます。山門跡からは、東方へ参道がゆるい傾斜で降っていきます。ここには山門の間口とほぼ同じ幅で17mにわたって砂混じりの粘土が貼られており、南側には長さ14m以上、高さ1.5mの大規模な石垣を築いています。垂直に築かれ、石材も巨大な石垣は、15世紀初頭の石垣構造がわかり、その後の石垣の祖型として重要です。寺院の中心的仏堂は保存状態が良くありませんでしたが、方形基壇と山門跡や参道が方位をそろえて配置されていることや、出土遺物にすり鉢などの日常雑器が少なく、良質な焼き物がめだつこと、背後に墓地があることなど、ここが寺院であることを示しています。

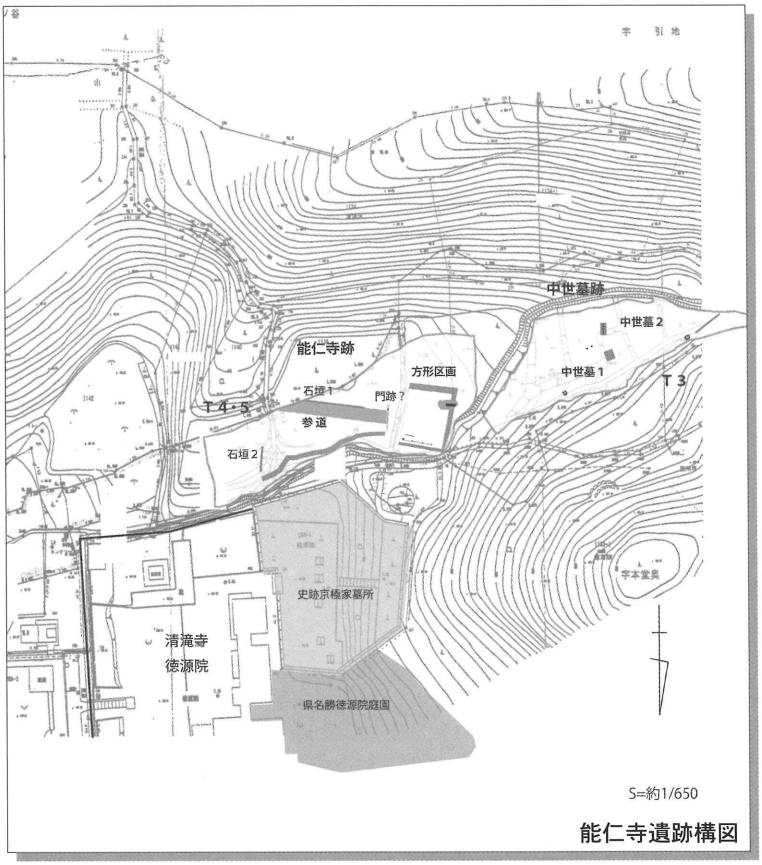
平成23年度 埋蔵文化財活用事業

能仁寺跡基壇（写真・図は滋賀県教育委員会提供）

参道と石垣

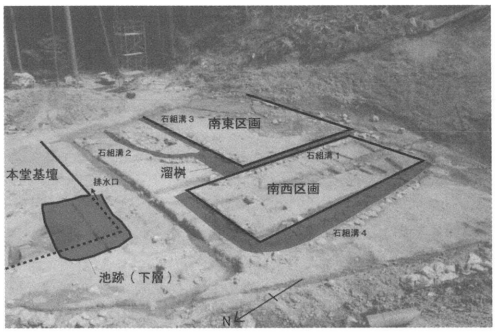
遺跡の上流部では、中世のお墓が２基発見され、古瀬戸焼の壺を用いた骨壺が出土しました。下流の仏堂背後にも石で囲った高まりに五輪塔（ごりんとう）が五基据えられ、部品が散乱していました。墓地を厚くおおう土砂からは200点以上の墓石の部品が出土し、なかに「貞治（ていじ）（三）年七月〇日」（1363）の銘があり、南北朝時代から墓地として使用されていたことがうかがえます。

中世墓



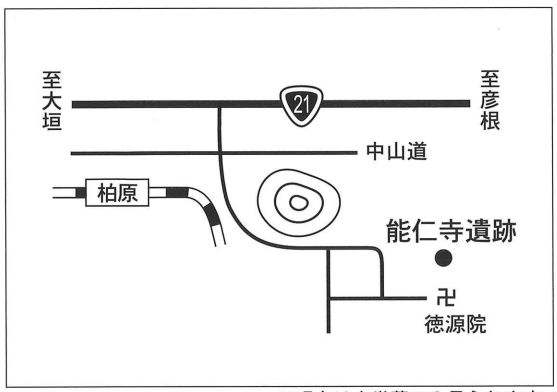
能仁寺遺跡構図

能仁寺の名は、寺伝の第七代京極高詮の戒名「能仁寺殿乾嶺浄高大居士」にみることができます。高詮は、応永８年（1401）に亡くなっており、菩提寺の能仁寺がこの前後に創建されたとすると、遺跡から出土した土器類の年代とも矛盾しません。



基壇南面区画

基壇南西部の下層から玉石を撒いた池跡が見つかりました。底から汀（みぎわ）（水際）まで、３～５cmほどの大きさの丸く扁平な川原石が、厚さ10cmほど積み敷かれて池の見栄えを整えていたと考えられます。撒き石の範囲は東西約3.7m、南北約2.5mで、中央部は汀よりも10cmほど窪んでいます。汀護岸の石列の際まで丁寧に撒き石を施していることなど、丁寧に造園されたようすがうかがえます。



※現在は中世墓のみ見られます。

能仁寺遺跡

■ 所 在 地　　滋賀県米原市清滝

■ アクセス　　JR東海道線柏原駅下車。徒歩約45分。

米原市教育委員会

〒521-0242　滋賀県米原市長岡1050-1
TEL.0749-55-8020　FAX.0749-55-4556

平成23年度 埋蔵文化財活用事業